

2019年6月23日(日) マルコ福音書1章9-15節 黄昌性牧師

今日は6月23日であるが、6月23日という「時間」は、「クロノス(χρόνος)」、つまり我々人間の観点から捉えた「時間」である。今年2019年はイエス・キリストがこの世に誕生し「クロノス(χρόνος)」の時間の概念において2019年経ったということ。一方で神様から見た特別な時である「カイロス(καιρός)」という概念がある。

マルコ福音書1章15節「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」の「時」の概念がまさに「カイロス(καιρός)」である。時が満ちた時にすぐさま悟ることができるよう、我々は常に「備える」ことが大切である。キリストは人間の罪のゆえにこの世の終わりが来る前に人間のクロノス(χρόνος)の時間に入ってきてくださった。9-11節「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。」イエス様がヨルダン川で洗礼を受けた時、聖霊は鳩の形のように彼の上に降りて来た。創世記1章にはヘブライ語の表現で、聖霊は鳥のように、まだ形が無い地の水の上を飛んだとある。地は混沌としていた。聖霊がその形の無い水の上を動いていた。今日の御言葉に3段階の徴を見る。第一段階は、洗礼を受け(9節)、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声を聞いたこと(10節)、第二段階は誘惑を受けられたこと。「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。(13節)」。

なぜ神であるキリストが誘惑を受けられたかということ、人間の罪の問題を解決されるためである。そして第三段階にガリラヤで伝道を始められたことである。「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。(14-15節)」。神を礼拝するために作られた人間がまるで自分が神の存在であるかのように傲慢になってしまった。そのような人間を神様は奴隷のように扱われず、むしろ自ら悔い改めて神様を礼拝することができるようになるよう導かれるのである。イエス・キリストが「今が悔い改めの時」と神様の福音を宣べ伝えられた。マルコ福音書1章9-15節

はイエス・キリストがガリラヤから始めてガリラヤで御業を終えられたことを示している。9 節でガリラヤで洗礼を受けられ、14-15 節において、バプテスマのヨハネがローマの権力者によって捕らえられたガリラヤにおいて、死をも厭わず福音を伝えられたのである。聖書における「礼拝」とは何であろうか。「礼拝」とは人間一人一人が神様と自分の間に織りなすドラマであるといえよう。ドラマの一場面を切り取るようにしてイエス・キリストはなぜバプテスマのヨハネから洗礼を受けられたかを考えると、イエス・キリストは人間の罪の問題に対峙し救いへと導くため、ご自身が「人間」にならなければならないことをご存じだったからであるということができる。イエス・キリストはバプテスマのヨハネから洗礼を受けなければならないことを分かっておられたのである。ところで、聖書の解釈は聖書によって行わなくてはならない。イエス・キリストについて記されている聖書箇所をともに開きたい。ヨハネ福音書 1 章 29 節「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」同 33 節には「わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。」とあり、バプテスマのヨハネはその信仰の目、ヨハネの内にある霊により、イエス・キリストに下ったのが神の霊であることが分かった。同様に、礼拝においても神の霊が我々の内にあることにより、キリストの霊の導きを悟ることができる。礼拝において、神を自分だけの神ではなく、我々の神とし、自分だけの思いでなく、我々の思いをもつべきである。神様の特別な時である「カイロス(καιρός)」に、イエス・キリストが現れた。ヨハネは預言者イザヤの言葉を引用してイエス・キリストの出現を語っている。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊 (ヨハネ福音書 1 章 29 節)」。マルコ 1 章 10 節「水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。」霊が鳩のようにイエス・キリストの上に降った。この時、イエス・キリストとバプテスマのヨハネは一体何をしたのであろうか。バプテスマのヨハネがイエス・キリストに洗礼を授けていたのである。形のないところにキリストが現れたのであろうか。そうではなく、形があるところにであった。有から有を創造したのである。世界の創造の時も同様であ

る。天地創造が第一の人間に対する神の救いの機会であったが、第二の機会がイエス・キリストの十字架の死であった。イエス・キリストが十字架刑で死なれる際に神殿の天幕が真っ二つに裂けたという記事がマルコ福音書 15 章 38 節に残されている。「すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」これは、和解の十字架を選ばれたキリストはこれまでは隠されていたが、今やこのキリストが現れたことにより、神と人の間が真っ二つに分けられ、神と人の世界が明らかになったことを表している。バプテスマのヨハネから洗礼を受けられたイエス・キリストはその 3 年後に十字架にかけられ死なれた。洗礼とは、この時代における罪の裁きと赦しの印であった。私たちが礼拝するとき、罪の裁きと赦しの印としての水の洗礼だけでなく、聖霊による洗礼が伴って初めて真の礼拝をささげることが可能なのである。イザヤ 42 章 2 節「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ彼は国々の裁きを導き出す。」イエス・キリストが洗礼を受けられてから伝道へと進む行程は 3 段階に分かれている(1. 洗礼を受けられる、2. 誘惑を受けられる、3. 伝道される)。これはキリストに背きクロノス(χρόνος)の時の概念の内に死ぬだけの者であった我々が、洗礼を受け、誘惑を退け、神の御言葉を宣べ伝えるとき、教会に、地域に神の御国が来て、神の伝道がキリストの時において、つまりカイロス(καιρός)の時において展開されることを明らかにするためであった。罪の内にあった人々がキリストによってカイロス(καιρός)の時において生まれ変わるのである。ところで、なぜキリストは神の子として受けられた栄光の座から、荒野へ送られなければならなかったのか。12 節「“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。」新共同訳では「送り出した」で、口語訳では「追いやられた」とある。16 章と短い編成であるマルコ福音書は、イエス・キリストご自身が福音であること、なぜイエス・キリストが十字架で死なれたかについて記された書である。キリストのご意志ではなく聖霊によってこの世の荒れ野に追いやられた。我々罪人が置かれている危機的状況である荒野の世界にイエス・キリストが来てくださったことを示している。イエス・キリストが荒れ野に「直ちに(Immediately)」、「送り出された」、それはイザヤの預言であり、創世記 22 章のアブラハムがイサクをささげた出来事を思い起こさせる。アブラハムがイサクを愛し、神がアブラハムを通してイサクを愛

する中で、アブラハムに神がイサクを捧げるように言われた。アブラハムが神様に愛されたのは、アブラハムに課された責任をアブラハムが全うしたからであることは非常に重要な点である。「御父は御子を愛してその手にすべてをゆだねられた（ヨハネ福音書 3 章 35 節）」のである。マタイ福音書 4 章 1 節「さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。」「霊によって送り出された」は、「背中を押される」イメージである。罪にある人間の救いのため、イエス・キリストは荒れ野に「送り出された」というよりも「背中から押された、追いやられた(Cast out, Drive out, エクバルロ)」場面を思い起こすべきであろう。それも、速やかに救われなければならない限界に来ている人間の罪のゆえ、アレグロの速度で(音楽用語、「速い」)「追いやられた」ということである。ルカ福音書 4 章 1 節「さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、」たイエス様。イエス・キリストの弟子であったマルコが記したイエス・キリストの御業は、マタイ福音書、ルカ福音書、ヨハネ福音書に記された救済の出来事とともに読むことにより正しいハーモニーを奏でる。マルコ 1 章 13 節「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」誘惑は心を惑わせ誘い込むこと、一方試みは、様々な苦しみにより人の心を鍛える。悪魔からイエス・キリストが誘惑を受けられたとあるが、神様からご覧になった時この出来事は試練なのである。キリストは人の子として誘惑を受けられ、同時に神の子として試練を受けられたのである。マタイ福音書、ルカ福音書においてイエスキリストはサタンから「石をパンに変えてみよ」、「神殿から飛び降りて、神を試みてみよ」、「神でなく私に仕えよ」という誘惑、試みを受けられた。マルコ福音書に誘惑の細かな記載がないのは、マルコはイエスが神の子であり、人間イエス・キリストで終わらないことに深く目をとめていたためであろう。聖書は罪とは何かを記している。イエス・キリストが光であることと正反対に、人間の罪を明らかにしている。創世記においてアダムとエバは、サタンの誘惑によって犯した罪のゆえにエデンの園を追い出された。「最後のアダム」であるイエス・キリストは、人間の罪のために 40 日間荒れ野に追いやられ苦悩を味わわれ、サタンとの戦いに勝利された。十字架の死に至るまで戦われたイエス・キリス

ト。ヘブライ書にある通り「キリストは罪のためにただ一度苦しまれた」。ご自分ではなく人間の罪のために苦しまれたのである。イエス・キリストは当時の権威者によってバプテスマのヨハネが捕らえられた状況であることを知りながらも福音を伝えるためガリラヤに行かれた。15 節「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。悔い改めに導くために福音が宣べ伝えられた。福音によって悔い改めが与えられなくてはならない。バプテスマのヨハネの殉教の死により、長かった旧約の時代が終わった。イエス・キリストの公の生涯は3年という短さであった。イエス・キリストは終わりの時が近いことを知っていた。ゆっくり福音を伝える時間がない状況であり、終わりの時が来ている、罪人の滅びが近づいている時なのである。愛と希望のイエス・キリストが「悔い改めなさい」と言われている。「神のもとに帰りなさい」と。旧約時代、ヤハウェの神様はアッシリア、バビロン、エジプトの捕囚となったイスラエルの人々に、「早く神のもとに戻りなさい。」と言われた。「戻る」とは悔い改めることである。なぜ人間は悔い改めなければならないのであろうか。それは、我々人間が神に似たものとして造られたからである。神は罪を犯さないから、我々人間も罪を犯さないようにすべきであり、罪を悔い改めなくてはならないのである。日本のキリスト教において、神のために何かをしなくてはならないという教えを聞くとき、それは盲目的な行いでないか、と捉えられることがある。神のために業をなし自分を捧げることはイエス・キリストによって救われた者にとって、当然のことである。ただし、盲目的にではなく、聖霊の豊かさの内に、神のためになすことである。イエス・キリストは人間の形をもってこの世に来られた。そして「今や時が来た」と言われたのである。イエス・キリストの時が来たのである。イエス・キリストの結びの言葉は罪による滅びの言葉ではなく、イエス・キリストの御身体を通した罪の赦しに導く愛と希望の言葉なのである。この御言葉の中に「キリストのもとに来なさい」、「キリストの御前にへりくだり祈りなさい」、「キリストの御前で聖霊によって悔い改めなさい」という憐れみが伴う。聖霊によって悔い改めるとき、あなたの人生が変えられるというキリストの慈しみの御言葉である。イエス・キリストがこの世に来られて 2019 年が経っていることは祝福である。イエス・キリストが、この礼拝の内にもう一度悔い改めなさいと言われている。最後に、イエス・キリスト

は十字架で死ぬためにこの世に生まれたのであろうか。一方でイエス・キリストがこの世に人の形をとって生まれたとき、天使たちがこぞって神を賛美し多くの人々が祝った。今は我々にはその真意はわからない。時が来ればキリストの栄光が我々の間に現れるであろう。時が満ちた今、神の国が来ている今、我々がすべきことは何であらうか。それは悔い改めて神の福音を信じることである。